

国際性について



巻頭言

小 泉 潤 二*

Being "International"

Key Words : internationalization, globalization, diversity, contemporary world

「国際化」という言葉が日本で頻繁に使われるようになったのは、おそらく1980年代頃からである。新聞記事でも学術シンポジウムでも、この言葉を使いこの概念をテーマとすることが、それ以前よりずっと多くなった。

今では大阪大学も、いわゆる「グローバル30」(国際化拠点整備事業)初年度採択13拠点の一つとなり、今後の10年で留学生を倍増させようとしている。留学生センターも強化される方向であり、大阪大学の国際貢献のために平成19年に設置されたグローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)も予算の増額と活動の拡大を目指している。大阪外国語大学との統合により、国立の総合大学で唯一外国語学部を持ち国際リソースを拡大した大阪大学は、新たな条件のもとで教育と研究における国際化を展開していくことになる。

私自身は、学部生時代にメキシコへの政府交換留学の機会を経て、自分が生まれ育った日本の環境とは根本的に異なる世界と歴史を生きる人々について知った。その後、大学院の修士を終えると同時にアメリカに留学し、博士課程の大学院生生活を送りながら、全世界で最も豊かな人々と最も力強く活発に行われる知的活動に接することになった。その間、

アメリカ国立科学財団(NSF)の資金で、中米グアテマラ北西部山間の農村に16カ月ほど住み込み、世界の最周辺部の、最も貧しく政治的社会的歴史的矛盾に満ちた状況で現地調査と研究を行った。米国に戻り学位を得た後、しばらくカナダのアルバータでポストドク生活を送り、同じ先進国の間の微妙な関係について感じるようになった。その後日本に戻って阪大に異動するまでいくつかの大学で教えながら、日本国内のさまざまな地域や大学や学生を見た。阪大の教授になると同時にプリンストン高等研究所に招かれ、世界最高の知的生産拠点とされる場を知った。

一時は、海外に滞在した時間が人生の2割を超えた時期もあった。現在、合計で10年ほどであるから、これは決して多くない。しかし振り返ってみれば、海外生活の時間的な長さや訪問し滞在した場所の数はあまり重要ではなかった。そうしたさまざまな地域と社会を自ら訪れ、それらの間の不安定で緊張に満ちた境界領域に身を置いたこと、そしてグローバル世界の中央と周辺に直接取り込まれ、この世界がいかにか「多様きわまる」人々により成り立っているかを日常生活の中で知ったことが、なにより印象的であるばかりでなく、かけがえのない財産となった。

現在は、人類学民族科学国際連合(IUAES)や人類学会世界協議会(WCAA)の中心として、国際連携と国際協力のための仕事をしている。結果としてみれば、「国際」に深く関わってきた。国際 international とは、国(nation)と国の間を意味すると同時に、民族(nation)と民族の間、人々と人々の間をも意味する。そうした「間」に身を置いてきたにしても、それは意図したことではなく結果だった。「国際化を目指す」という標語はよくみるが、国際化は目的や目標ではない。国際化は常に結果である。逆説的ではあるが、「国際化」という言葉が使われ



* Junji KOIZUMI

1948年9月生

Ph.D., Anthropology, Stanford University
スタンフォード大学大学院 人類学博士
課程修了(1981年)

現在、大阪大学 理事・副学長(教育・情報担当) 附属図書館長 人類学博士 文化人類学・中南米研究

人類学民族科学国際連合(IUAES)事務
総長、人類学会世界協議会(WCAA)前
会長

TEL : 06-6879-7002

FAX : 06-6879-7007

E-mail : koizumi@hq.osaka-u.ac.jp

なくなったときはじめて、国際化が十分に進行したことになる。

それにしてもこのグローバル世界は、政治についても経済についても文化についても、先が見えなくなっているをつくづく思う。まったく予想もされなかったことが起きており、これからも起きるであろう。拠点リーダーを務めているグローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」

の研究成果を待つまでもなく、世界の変化は加速し、流動性は増大し、軋轢の根は深い。こうした中で必要なのは、どのような状況にも機敏かつ柔軟に、多様な視点から理解すると同時に滑らかに意思疎通し強靱に対応できる能力である。本当の国際性とは、そのような能力ではないか。大阪大学の教育を通じて、そうした能力の育成を実現できればと思う。

